

# 東方正教会と新約聖書キリスト教の矛盾

## 導入

ヨハネの黙示録 2 章から 3 章には、イエス・キリストが小アジアの 7 つの教会に宛てた手紙が収められており、それぞれが歴史的な呼びかけであると同時に、時代を超えたより広範な教会の状況を象徴する類型として機能している。これらの教会の中で、ペルガモンの教会（黙示録 2:12-17）は、迫害の中での信仰の堅持を特徴とするキリスト教の一段階を表していると終末論的な枠組みで解釈されることが多い。具体的には、バラム（偶像崇拜と不道德につながる）やニコライ派（聖職者による信徒への階層制）に似た教義を堅持していた時期である。歴史的に見ると、ペルガモンは皇帝崇拝の中心地であり、「サタン玉座」はゼウスの祭壇、あるいはローマ皇帝への崇拝を指している可能性があり、国家権力の絡み合いを象徴していると考えられる。これを東方正教会に適用すると（現代の教義を用いた以前の分析から再評価すると）、称賛に値する古代信仰の保存と、国家権力との統合（ビザンツ皇帝教皇制）、階層構造、避妊や離婚といった現代的な許容事項など、新約聖書の純粋さからの逸脱とされるものとの間の緊張関係が浮き彫りになる。これらはバラムの教えに似た道徳的妥協と見なされている。この書簡は、キリストの名を堅く守ることを勧める一方で、誤った教義を容認することを戒め、悔い改めを呼びかけ、勝利者には隠されたマナを約束している。この類型論は教義上の警戒というテーマを強調しており、正教会の歴史的な帝国とのつながりや聖書外の要素に対する批判と一致する。

「正教会」という用語は、初期キリスト教共同体に起源を持ち、伝統、典礼、教義を通して使徒たちとの途切れることのない連続性を主張する東方正教会を指します。この文脈でよく用いられる「新約聖書キリスト教」は、典礼や崇敬の慣習といった後世の発展を伴わず、聖書のみに基づくキリスト教の一形態を意味します。批判者たちは、正教会の特定の信仰や慣習が、権威、救済、礼拝、人間性に関する新約聖書の教えと矛盾すると主張しています。しかし、正教会の神学者や弁証家たちは、自分たちの教義は使徒伝承と教父（アタナシウス、大バシレイオス、ダマスコのヨハネといった初期キリスト教の指導者たち）の著作を通して解釈された聖書と完全に一致していると主張しています。

以下では、聖書と正教会の教父たちの著作に基づき、主な矛盾点とされる箇所を概説します。これらは、一般的な批判と正教会の反論に基づいています。教父たちは正教会の基盤となる存在であるため、

正教会の立場を支持するためにしばしば引用されますが、解釈は様々です。可能な限り一次資料からの裏付けを重視し、バランスを取るために両方の立場を提示するように努めました。

## 1. 伝統の権威 vs. 聖書のみ権威

- 批判者の見解：正教会は「聖伝」（公会議、教父の著作、典礼、イコンなどを含む）を聖書と同等の権威を持つものとしているが、批判者たちはこれが聖書の至上性を無効にし、人為的な教義を生み出すと主張している。これは、聖書が十分であり、神の靈感によって書かれたものであり、他に誤りのない資料を必要としないとする新約聖書の記述と矛盾する。例えば、テモテへの第二の手紙 3 章 16-17 節には、「聖書はすべて神の靈感によって書かれたものであり、教え、戒め、正し、義のうちに訓練するために有益です。それは、神のしもべが、あらゆる良い働きのために十分に整えられるためです」とある。批評家たちは、これによって聖書外の伝統は不要になると主張し、イエスがファリサイ派の人々を神の言葉よりも伝統を優先したとして叱責した言葉（マルコ 7:13：「このようにして、あなたがたは自分たちが伝えてきた伝統によって神の言葉を無効にしている」）を彷彿とさせる。
- 正教会の反論：伝統は聖書とは別個のものではなく、聖書よりも上位にあるものでもありません。聖書自体が口頭伝承と文書伝承の両方の使徒的教えを守るよう命じているように、伝統は聖書を包含するものです。テサロニケ第二 2:15 には、「私たちが口頭で、あるいは手紙であなたがたに伝えた教えを堅く守りなさい」とあります。バシレイオス大帝（紀元 330 年頃～379 年）のような教父は、『聖霊について』（第 27 章）の中で、成文化されていない伝統（例えば、十字架のしるし）は聖書と同等の使徒的権威を持つと断言し、教義の腐敗を防ぐために伝えられたと主張しています。正教会の資料は、教会が伝統（例えば、紀元 397 年のカルタゴ公会議など）を通して新約聖書の正典を編纂したことを強調しており、伝統を否定することは聖書自身の権威を損なうこととなります。彼らは、聖書のみを重視することは解釈の混乱を招くと考えている。なぜなら、聖書は教会の文脈なしには自己解釈できないからである。

## 2. 救いは相乗効果（恵みとの協力）によるものか、それとも信仰のみによるものか

- 矛盾とされる点（批判者の見解）：正教会は、救いを、人間の協力と神の恵み（相乗効果）を伴うプロセスとして教えており、秘跡や禁欲的な修行などの行いが「神化」（神化、神に似た者となること）につながるとしている。これは、行いとは無関係に信仰のみによる救いを強調する

新約聖書の教えと矛盾するとされている。エフェソの信徒への手紙 2 章 8-9 節には、「あなたがたは恵みによって、信仰によって救われたのです。それはあなたがた自身から出たものではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることがないためです」とある。批判者たちはローマの信徒への手紙 3 章 28 節（「人は律法の行いとは無関係に、信仰によって義と認められる」）を指摘し、正教会は義認（義の即時宣言）と聖化（継続的な成長）を混同しており、人間の努力を加えることで魂を滅ぼす可能性があると主張する。

- 正教会の反論：救いは恵みによるものですが、信仰は能動的で協力的なものであり、聖書は信仰と行いを分離することなく統合しています。ヤコブ 2:24 には「あなたがたは、人が信仰のみによってではなく、行いによって義と認められるのを見えています」とあり、26 節には「霊のない体が死んでいるように、行いのない信仰も死んでいるのです」とあります。アタナシウス（紀元 296 年頃～373 年）のような教父は、『受肉について』の中で、神化をキリストの受肉を通して人類が回復すること、すなわち、功績によってではなく、神の命にあずかること（ペトロの手紙二 1:4 「あなたがたが神の性質にあずかるため」）と説明しています。正教会は、行いは功績ではなく恵みの実りであることを明確にし、神と人間の協働を示すためにフィリピ 2:12-13（「恐れおののきながら自分の救いを達成しなさい。あなたがたのうちに働いてくださるのは神だからです」）を引用しています。彼らは、「信仰のみ」は聖書の完全な証言を無視し、反律法主義（無法状態）に陥る危険性があると主張する。

### 3. 聖像と聖人の崇敬 vs. 偶像崇拝の禁止

- 矛盾とされる点（批判者の見解）：聖人や聖母マリアのイコンにひざまずいたり、キスをしたり、祈ったりする正統派の慣習は偶像崇拝または崇拜行為とみなされ、新約聖書にはそのような慣習がなく、旧約聖書には彫像を禁じる戒めがあることと矛盾する。出エジプト記 20 章 4-5 節（新約聖書の文脈で参照されている）は、「あなたは自分のために偶像を造ってはならない…それらにひざまずいてはならない、それらを拜んではならない」と警告している。批判者たちは、聖人を仲介者として呼び出す新約聖書の先例がないことを指摘し、テモテへの手紙第一 2 章 5 節の「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人であるキリスト・イエスです」を引用している。
- 正教会の反論：崇敬（ドゥリア）は、キリストの体の仲間として聖人を敬うものであり、神にのみ捧げられる礼拝（ラトリア）とは異なり、イコンは神への窓であって偶像ではない。聖書には、黙示録 5 章 8 節（長老たちが聖人の祈りを捧げる）やヘブライ人への手紙 12 章 1 節（証人の雲）のように、崇敬の様子が描かれている。教父ダマスカスのヨハネ（紀元 675 年頃～

749年)は、『神の像について』の中で、受肉を引用してイコン破壊運動に反対し、神がキリストにおいて目に見える存在となった(ヨハネ1:14)ので、神を描くことは神の人間性の現実を敬うことであると主張している。正教会は、旧約聖書のノアの箱舟のケルビム(出エジプト記25:18-22)のような先例を挙げ、新約聖書はそのような象徴を廃止するのではなく、成就していると主張する。聖人に祈るということは、地上の願い事と同様に、聖人に執り成しを求めることを意味します(ヤコブ5:16:「互いのために祈りなさい」)。

#### 4. 原罪と人間性に関する見解

- 矛盾とされる点(批判者の見解): 正統派は「先祖の罪」(人類はアダムから死すべき運命と罪を犯す傾向を受け継ぐが、個人的な罪悪感を受け継がない)を教え、全的墮落や罪の転嫁を否定している。これは新約聖書における人類の束縛の描写を和らげ、キリストの贖罪の必要性を弱めているとされている。ローマ人への手紙5章12節、18節には「一人の人を通して罪が世に入り、罪を通して死が入りました。一人の罪によって、すべての人が罪に定められました」とある。
- 正教会の反論: 墮落は死と腐敗をもたらしたが、罪は個人的なものである(エゼキエル書18章20節:「罪を犯す者は死ぬ」)。教父イレナイオス(紀元130年頃~202年)は『異端反駁』の中で、アダムの罪は人類に弱さを蔓延させたものであり、自動的に破滅をもたらすものではないと述べ、キリストの再来によってそれを癒すことを強調している。正教会は詩篇51篇5節(「確かに私は生まれた時から罪人であった」)を詩的な表現であって教義上の罪悪感ではないと引用し、自分たちの見解は、生まれた時から普遍的な断罪を前提とすることなく、悔い改めを求める新約聖書の呼びかけと一致すると主張する。

#### 5. 秘跡(聖体拝領や告解など)は本質的なものか、象徴的なものか

- 矛盾とされる点(批判者の見解): 正統派は聖体拝領をキリストの真の体と血(繰り返される犠牲の記念)と見なし、赦しを得るためには司祭への告解を必要とするが、これは新約聖書の一度限りの犠牲と神への直接のアクセスと矛盾する。ヘブライ人への手紙10章10節、14節:「私たちは、イエス・キリストの体の犠牲によって、一度限り聖なる者とされたのです。…キリストは、一つの犠牲によって、聖なる者とされる人々を永遠に完全な者とされました。」ヨハネの手紙一1章9節は、神への直接の告解を約束している。
- 正教会の反論: 聖体拝領はキリストの永遠の犠牲への参与(ヘブライ人への手紙13:8:「イエ

ス・キリストは昨日も今日も永遠に変わることのない方です」)であり、ヨハネによる福音書 6:53-56(「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はありません」)にあるように、再犠牲ではありません。教父アンティオキアのイグナティオス(紀元35年頃～107年)は、スミルナ人への手紙の中で、聖体を「不死の薬」と呼んでいます。司祭への告解は、ヤコブの手紙5:16とヨハネによる福音書20:23(キリストが使徒たちに罪を赦す権威を与えた)を成就するものです。正教会は、秘跡を象徴的なものではなく、恵みに満ちたものと捉えており、初期教会の慣習に合致しています。

## 6. 聖書正典(第二正典の包含)

- 矛盾点(批評家の見解): 正統派聖書には、トビト記やマカバイ記(一部の見解では外典)といった書物が含まれていますが、これらは新約聖書では権威ある書物として引用されておらず、教義上の誤り(例えば、マカバイ記第二12章の死者のための祈り)が含まれているとされています。これは、イエスが用いたヘブライ語聖書を超えて正典の範囲を拡大するものであり、新約聖書が暗示している39巻からなる旧約聖書と矛盾します。
- 正教会の反論: 七十人訳聖書(これらの書物を含むギリシャ語旧約聖書)は、イエスと使徒たちによって用いられました(例えば、ヘブライ人への手紙11章35節はマカバイ記第二7章に言及しています)。アタナシウスのような教父たちは、367年の第39回祝祭書簡でこれらの書物を教訓的であると列挙し、公会議もそれらを肯定しました。正教会は、これらの書物の削除は革新であり、これらの書物は(ヨハネの黙示録8章3-4節と一致する)執り成しなどの教義を支持していると主張します。

要約すると、これらの「矛盾」は、解釈学の違いに起因することが多い。聖書のみを重視する立場は個人の解釈を優先する一方、正教会は教父と聖霊に導かれた共同体の伝統を重視する。正教会の資料は、自分たちの慣習が新約聖書のキリスト教を体現していると主張するが、批判者は使徒時代以降の付加的な要素だと見ている。より深く探求するには、フィロカリア(教父たちの著作)などの一次資料を参照すべきである。正教会の文脈で擁護される歴史学は、第二神殿時代のユダヤ教と初期教会の慣習を検証することで、これらの矛盾を解明することができる。